

## 『大音楽家に影響を与えた女性たち：ドビュッシー』

伊藤美由紀（2400字）

ドビュッシーの音楽人生に大きな影響を与えたと言われる3名の女性たち、メック夫人、ヴァニエ夫人、2度目の妻となるエンマ＝バルダック夫人（娘、クロード＝エンマ）を中心にまとめてみたい。

夫の死後、多額の財産を相続した資産家のメック夫人は、チャイコフスキーの保護者として名高い。ドビュッシー20代の頃、学資を稼ぐ為に彼女の娘のピアノ教師となり、ピアノ伴奏者として、フィレンツェ、ヴェニス、ウィーン、モスクワ等のヨーロッパ各国に演奏旅行に付き添った。彼女は、フランスのシェノンソー城でよく過ごしており、その際に、若手の夫人の息子達を含んだピアノ三重奏の演奏を好んだ。後には、ピアニストとして、ドビュッシーが雇われ、アンサンブルとして、クラシック音楽、チャイコフスキーの室内楽曲、即興演奏などを行った。ウィーンでは、ヴァグナーの《トリスタンとイゾルデ》などの公演を聴く機会に恵まれ、深く感銘を受け、後の彼の作曲活動に大きく影響を与えた。また、ドビュッシーの現存する最初のピアノ曲《ボヘミア風舞曲》(1880)は、メック夫人により、チャイコフスキーに渡されたものの、好ましくない評価をもらう。しかしながら、メック夫人を通して、チャイコフスキー、ロシア5人組の作品に触れる事ができたのは、意義のあることであった。

次のヴァニエ夫人には、ドビュッシーが学生の頃、アルバイトとして声楽家のモロー＝サンティ夫人の歌唱塾の伴奏者をつとめていた時に会う。彼女は、歌唱塾に生徒として通っていた。また、モロー＝サンティ夫人には、ドビュッシー最初の歌曲、《星の夜》(1882)を捧げている。アマチュアのソプラノ歌手であったヴァニエ夫人は、彼のあこがれであり、彼女のために数多くの作品を残した。ドビュッシーは、初等教育もまともに受けた経験がなかったのであるが、ヴァニエ夫妻の支援のもとに、ヴァニエ家のピアノで作曲をし、本棚の様々な本や辞書を読み尽くし、独学で文学的教養を身につけていった。その時に、ヴェルレーヌらの詩にも出会ったのであろう。習作期から晩年まで、歌曲のジャンルは、ドビュッシーにとって重要であった。特に習作期は、ほとんど女声とピアノの為の歌曲作品となり、後の彼の独自の音楽語法を確立する重要な時期であった。特に、ヴァニエ夫人の声は、高音域のソプラノで、歌唱力もあつたようで、彼の声楽作品に対する創作意欲を刺激したのであろう。ヴェルレーヌの

《雅やかな宴》に基づく5曲、テオフィル・ゴーチェによる詩《死後の艶姿》、ポール・ブルジェの詩による6曲、そしてミュッセの詩による2重唱曲《スペインの歌》を含んだ、夫人の為に書かれた13曲の歌曲《ヴェニエ歌曲集》を、ローマ大賞を得てヴィラ・メディチに留学する前に、夫人に献呈している。ドビュッシーは、フランス語の響き、アクセントなどの特性を生かした柔軟で流動的な旋律線を、フランス語のテキストの言葉の深い意味を理解しつつ、音楽性を大切にしながら創造している。2～3分の各々の歌曲の小品のなかでは、ドビュッシー特有の旋律や、和声的な感性が散りばめられており、その後の彼の作曲活動に多大な影響を与えている。リートは、ドイツ語特有の強勢アクセントを生かした歌曲であるのに対して、フランス語の特徴となる子音による囁き、繊細な響きを生かして、流動的な旋律線を音楽的に表現した歌曲が、ドビュッシーの作品である。彼の声楽作品の多くは、30歳までの若い頃に集中しているが、生涯にわたって、彼にとって重要なジャンルであった。20代の作品の中では、彼特有の旋律スタイル、和声、リズム語法が、成長、展開されていく。作曲家本人が、直接、声楽家と関わり、伴奏をしながら制作をすすめていたことも、作曲過程で大きく影響したであろう。

10代～20代の習作期に、以上の2人の重要な芸術に理解のある女性たちに出会った経験は、その後のプロの作曲家として成長する上での、甚大な影響力となったであろう。

30代には、何人かの女性との結婚の話が進んでいたが、37歳でリリー・テクシエと結婚する。しかし、うまくいかず、声楽家であるエンマ・バルダック夫人と再婚する。ドビュッシーと出会った当時は、銀行家と結婚しており、その後、彼女はフォーレと再婚、離婚し、ドビュッシーと再婚するのである。43歳で、娘クロード＝エンマが生まれ、愛称シュシュとして溺愛する。46歳の時には、6曲の小品からなるピアノ組曲《子供の領分》(1909)を娘に捧げる。エンマ夫人が、英国趣味に心酔していたことから、《子供の領分》のタイトル、6つの小曲のタイトルも、フランス語ではなく英語で表記されている。この作品は、子供に弾かせるために書かれているのではなく、端的で生き生きとした活気のある表現で、大人が子供らしい気分浸ることを意図している。クレメンティの練習曲をもじったタイトルで、ピアノの繰り返す練習に退屈する子供の姿をパロディ風に描いた第1曲〈グラドゥス・アド・パルナッスム博士〉、第2曲〈象の子守歌〉、第3曲〈人形へのセレナード〉、第4曲〈雪は踊って

いる〉、第 5 曲〈小さな羊飼い〉、ジャズのリズムや、《トリスタンとイゾルデ》の動機をもじった旋律が含まれる軽快な第 6 曲〈ゴリウオーグのケーキウオーク〉の全 6 曲である。各々の小品では、5 音音階、全音音階、東洋風な旋律や不協和音などを入り混ぜた美しい音響であるが、子供をイメージしているせいか、基本的には調性で書かれており、娘のイメージにぴったりの愛らしい小品集である。しかし、不幸な事に、娘のエンマは、父ドビュッシーの死後 1 年後に、14 歳でジフテリアにより亡くなっている。

女性関係によるトラブルが絶えなかったと言われるドビュッシーであるが、様々な人間関係から音楽へのインスピレーションも生まれ、微妙な音色の変化、繊細な響きで独自の音楽語法を探求している美しい作品を生み出したのである。